畜舎内換気と保温対策

乳牛

成牛は寒さへの適応性は比較的高いですが、低温時には熱エネルギー源として乾物 10～20%を増給することが推奨されています。

一方、子牛は寒さにとても弱く、生後 1 ヶ月までは特に保温が必要です。敷料が湿っていると体温が奪われるため、肺炎や下痢などを起こしやすくなります。

寒くなると保温のため牛舎を閉じがちになりますが、畜舎内のアンモニアやほこり、湿気の除去のためには換気が必要です。牛床が湿っていると病原菌が増えるため、乳房炎や蹄疾患の発生につながります。

乳牛は 1 日に 30～100 リットルの水を飲みます。給水管の凍結防止策も重要です。

肉用牛

畜舎を密閉状態にすると、アンモニアや二酸化炭素が畜舎内に充満し肺炎などの原因となります。肉用牛は低温への適応力は高いので、寒さを気にしないで換気をしっかり行ってください。ただし、牛体に直接吹きかけてくるすきま風は体感温度を下げ、下痢や肺炎などの誘因となりますから牛体には直接風が当たらないように工夫をして下さい。また、牛床が湿っていると腹部から体温が奪われるので注意が必要です。

一方、子牛は低温には弱く、特に新生子牛では被毛と皮下脂肪が少なく、体の容積に比較して体表面積が成牛より大きくなっていることから、寒冷ストレスに敏感であり肺炎や下痢などにかかりやすくなります。換気やすきま風対策に加えて、子牛が生まれたら体をタオルで拭き早く乾燥させる、初乳を確実に飲ませる、敷料を充分に用いて子牛の腹を冷やさない、保温ジャケットや保温ランプを使用するといった対策が効果的です。

豚

冬季は特に離乳～肥育期の呼吸器疾患が多発しやすい季節です。予防対策としては、温湿度や換気などの飼養環境を良好に保つことが大変重要です。

豚舎内の適正湿度は 60%以上と言われています。細霧装置の使用などを検討してみて下さい。温度では、気温が大きく下がり始めたころに事故が多くなっています。天気予報で翌朝の気温を確認し早めの対策をとることをお勧めします。また、すきま風は体感温度を下げるので、すきまの目張りや防風カーテンの設置なども必要です。

鶏

冬はウイルスを原因とする呼吸器病が多くなります。ウイルスは低温に強く、夏であれば数時間で感染性を失うのに対し、冬は数日間あるいはそれ以上の期間、感染性が持続する特徴を有します。また、密閉した鶏舎ではアンモニア、二酸化炭素の濃度が高くなり、呼吸器粘膜の抵抗性が弱まり病気に感染しやすくなるとともに、鶏舎内に入れた暖房によって床が乾燥しほこりが舞い上がることも呼吸器を傷つける原因となります。晴れた日の日中など比較的気温の高い時間帯に換気を行うようにして下さい。